イラスト：佐藤アモール陽子

PARADISE YAMAMOTO

度熱だしても絶対看病しないからね」などと、さんざんなじられながら家をあとにしました。

ゴールデンウィーク最後の土曜と日曜に東京から約百キロ西へ行った。山梨県のとあるキャンプ場へ向かいました。クルマ3台は高速道路のPAで待ち合わせをして集合。それぞれにトランシーバーがいき渡り「チャンネルは、やっぱりフジテレビ～」とかなんとか言ってる奴がトランシーバーのダイヤルを8に設定。とその瞬間「○○さん○○さん、お元気ですか？どうぞ」などとワケのわからない会話が飛びかい、ウケを狙わんばかりに車内のカーステレオでガンガン「殿さまキングス」をかけまくりながらそれを送信し続ける奴（私のこと）など、とっても楽しい高速道ドライブでした。私のクルマなんか寒くなったときに飲むホットワイン用の赤ワインなどしこたま買いこんで再び出発。緩やかなワインディングを約三十分程せめたところで、もう到着。炭熾こしたり、肉や野菜切ったりで、気分はすっかり小学生の炊事遠足。なんてったってトレーラー型のキャンピングカーが最初から用意されているので、テントを張る必要もないし、食器の後片づけなんかも楽チンそのもの。でかいアイスボックスの中にはトーキョーのスーパーでしか売ってないような食材がぎっしり詰まっていて、炭で網焼きしただけでほっぺが落ちそうになるものばかり。自然の中とはいえ、コーラの自動販売機があったりで、なんか人為的な施設が目について釈然としない一方で、普段からそういう風景に慣らされているほうとしては、逆に安心してしまうというのも何鹿にしていたオートキャンプが、実はこんなに楽しいものだったなんて、とてもお恥ずかしいおハナシです。

週末は、みなさんも外に出て遊びましょう。

【プロフィール】 元東京パノラママンボボーイズのリーダー。富士重工業デザインセンターで、カーデザイナーとしても活躍していた初代レガシィツーリングワゴン、アルシオーネSVXなどのデザインを手掛ける。新番組、土曜夜7時からの『テレビの王様』（TB系）でもマンボなコラムニストとして活躍中。マンボ画家ソリマチアキラといっしょの東京ラテンムードデラックスも現在全国ツアー中！タイムストッパーズと共にDJでまたまた京都へ出没するから、今後クラブのフライヤーは要チェックね！

着倒れ京都人に送る。ササイな情報

「今、何がお洒落なんですか？」

この質問が一番困る。何がお洒落なのかは、個人が好きに判断すれば良い。「黒を着ればお洒落です」という時代は10年前に終わっている。

ましてや、「どのブランドがお洒落なんですか？」などという質問は、答えようがない。「知らない」と答えられれば楽なのだが、根が優しいので、「○○○○○じゃないですか」とお茶を濁しておく。

仕事柄「お洒落」に敏感だと思われているようなのだけれど、さほどでもない。ファッションに関わっている人達に興味があるのであって、"お洒落"と思う感覚は非常に個人的な感情に左右される。その個人的な感情の押し付けはしたくないし、結局"お洒落"と判断する感情は、相手の中身に負う部分が大きい。相手が古着を着ていようが、シャネルを着ていようが、その人の内面次第ということになる。

したがって、「今、誰がお洒落ですか？」という質問は、その都度わりと明確に答えられる。これまで、あまりデザイナー本人をお洒落だなぁと感じたことはないのだが、ロンドンのフィリップ・トレイシーというデザイナーに会ってから、どうも気になって仕方がない。

デザイナー、特にハイファッション系のデザイナーというのはジバンシーに代表される白衣スタイル、扇子にチョンマゲのラガーフェルドや、ウエスタンブーツにMA1のモンタナのように、一貫して自分のイメージを演出してしまうタイプと大きく二つに分かれる。中には、ジョン・ガリアーノのように毎シーズンのコレクションのフィナーレごとに登場するスタイルが楽しみなデザイナーもいるが、彼はその作品同様特別な存在。フィリップ・トレイシーは自分を演出している様子もなく、ごく自然体ながら、明らかにほかのデザイナーとは違った空気を自分の回りに漂わせている。

フィリップ・トレイシー。今シーズン話題になったショーに必ず登場した名前である。

正式にはクチュール・ハット・デザイナー。彼が今秋冬コレクションで帽子のデザインを手掛けたのはシャネル、ヴァレンティノ・ガラバーニ、ヴェルサーチ、イスタンテ、リファット・オズベック、カルバン・クライン、ブルマリーン、ザビエル・フォーリー、ベラ・フロイトなど10ブランドを数える。正に時代の寵児、その天才ぶりはパリ、ミラノ、NY、ロンドンの各コレクションで絶賛された。

弱冠26才ながら、ロンドンのベルグレイビアのアトリエで初めて会ったときは、その年齢以上に若く見えた。実際、3年前に彼がロイヤル・カレッジ・オブ・アートに在籍しているときから、彼の才能はロンドンのファッションシーンで話題を呼んでおり、我々の耳にもその名前はインプットされていた。

アトリエ兼ショールームはゴールド張りで、インテリアデザインはトム・ディクソン。ロンドンデザインに興味のある人間にはドキッとする名前である。そこに現われた彼は、実に普通のロンドン子だった。ディスプレイしてある様々なマテリアルを使った手の込んだエレガントなクチュールハットとは、一瞬結び付かない彼のラフなスタイル。色を重ねたTシャツで遊んだコーディネートは、彼のトレードカラーである赤がベース。作品とインテリアと彼のスタイルのギャップが、会話の時間に比例して重なってくる。不思議な空気を感じさせてくれる相手はいつもお洒落である。

プロフィール 1959年京都生まれ。流行通信社・WWDジャパン編集部デスク。東京中心のファッション情報のなかで関西に留まり、10年以上にわたり世界の服飾産業を見続けている。91年より大阪コレクションの選考委員として、海外、新人のデザイナーのショーもサポート。

NODA TATSUYA